

第十一編 観光

第一章 合併以降の観光振興

安平町の初代町長に就任した瀧孝は、「平成十八年度町政執行方針」において、町政運営の基本姿勢として、早来地区と追分地区の特性や特色を最大限に活かし、均衡ある発展を目指す方針を示すとともに、当面する重要課題として合併時に策定された「新町まちづくり計画」を継承した「第一次安平町総合計画」の樹立を掲げた（平成十八年度町政執行方針）。

「新町まちづくり計画」では、地域資源の活用と各地区の連携を基本とした地域別におけるまちづくりの方向性が定められ、観光振興に関して、早来地区は「回遊・滞在型観光を目指した新たな観光的な魅力づくり」、追分地区は「追分町IC周辺における産業・観光機能の集積」と「鉄道文化や自然資源を活かした新たな観光的な魅力の創出」がそれぞれ示された（新町まちづくり計画）。

この「新町まちづくり計画」で示された観光振興の方向性を踏まえて平成十九（二〇〇七）年三月に策定された「第一次安平町総合計画」では、「恵まれた立地条件を活かしたまちづくり」を基本目標に掲げ、現状でも年間約四十万人の観光客が町内に訪れているといった大きな可能性を最大限活用することで、町の魅力を発信し、観光を地域活性化の起爆剤とすることが期待された。

これら基本目標に基づく観光振興施策として、町内の主要観光施設をクラスターেশションの拠点施設に指定するとともに、新たな観光資源の発掘や整備を推進し、地域資源を活かした観光コンテンツの開発に取り組んだ。また、民間企業による「鶴の湯温泉」の再開発を進めたほか、花をテーマとした観光振興の推進、新たな特産品の創出や各種イベントの開催支援などにより、観光客誘致の強化を図った。さらには、観光ネットワークの観点から、町内観光ルート開発や広域観光ルートの形成を進めるとともに、東胆振地域ブランド創造協議会との連携を図ることで、さらなる観光需要の喚起を目指した。

このように「第一次安平町総合計画」では、既存の観光資源の有効活用や新たな観光資源の開発といった安平町の観光基盤を確立する重要な施策に取り組んできた。しかし、町内での回遊や周遊をさらに促進するためには、町の魅力を発信する拠点づくりとともに公民連携による観光振興が急務であり、さらには、グリーンツーリズム推進による農業の魅力や地域の情報発信など新たな課題も浮き彫りとなった。

図表11-1-1 入ル

「第一次安平町総合計画」の成果と課題を受けて平成二十九年三月に策定された「第二次安平町総合計画」における観光分野では、公民連携による回遊・交流事業の推進を基本

施策として、道の駅をはじめとする交流拠点施設の整備を進めるとともに、観光協会を中心に町民・関係機関・行政が一体となって観光コンテンツの開発を推進し、交流人口の拡大を図ることで地域活性化を目指す方針が示された。

この方針に基づく具体的取り組みの中で、最重要施策に位置づける回遊・交流ステーション形成事業の実現に向け、拠点施設である道の駅の整備をはじめ、多くの来訪者と滞在時間の向上を目指し、プロモーションや情報発信、イベントを展開するとともに、公民連携による町内の観光資源を回遊する仕組みづくりを構築した。また、JR追分駅を中心とした「追分ゲートウェイ整備プロジェクト」やスタンプラリーの実施、キャンプ場の拡充整備など、町内商店街への誘導や地域経済への波及効果を狙いとした事業にも取り組み、加えて、日本遺産「炭鉄港」や「北海道いぶり五大遺産」を活用した広域連携を積極的に進め、関係人口・交流人口の拡大にも寄与した。

一方で、公共施設を活用した合宿誘致の促進に向け、高校・大学・企業等のスポーツ合宿や大会の誘致を進めるとともに、町民センターの大規模改修に併せた合宿施設機能の整備も行われ、さらには、安平町の基幹産業である農業の魅力を通じ地域との交流や情報発信を目的としたグリーンツーリズム事業を展開し、関係機関や就農者・生産者と連携しながら、受入れ体制の整備や人材育成の推進を図った。

これらの取り組みを通じて、観光基盤の整備が進む中で、観光資源を活用した町全体の認知度向上が着実に図られ、平成三十一年に「道の駅あびらD51ステーション」が開業したことにより、安平町の観光客数は飛躍的に増加した。特に当該年度における大幅な伸びは、同施設の開業前後におけるプレイイベントや積極的なプロモーション活動が奏功した結果と考えられ、安平町の観光振興において画期的な出来事であり、その後も町の重要な観光資源としての役割を担っている。

このような中、安平町の観光振興にとって大きな痛手となったのが、平成三十年九月六日に発生した北海道胆振東部地震である。この地震は、町内にも大きな被害をもたらし、住宅や公共施設が損壊するとともに、ライフラインが一時的に麻痺した。

加えて、令和二（二〇二〇）年以降、新型コロナウイルス感染症の影響により、観光客数は一時的に減少し、旅行制限や外出自粛が強く求められたことから、道の駅を含む多くの観光施設で入込客数が落ち込む事態となったが、このような中でも、令和三、四年にかけては徐々に回復の兆しが見られ、町の観光需要が再び高まりつつあることが確認できる

（図表1-1-1-2参照）。

図表1-1-1-2 入ル

第二章 観光拠点としての道の駅と観光協会の設立

第一節 道の駅あびらD51ステーション

道の駅あびらD51ステーションの建設 道内一二四番目の道の駅として平成三十一（二〇一九）年四月十九日に開業した道の駅あびらD51ステーションは、安平町観光の新たな拠点として、地域の歴史と未来を結ぶ象徴的な存在である。この道の駅にはシンボリックな存在として、追分地域の誇りである蒸気機関車D51320号機が保存・展示され、地域特産品や加工品の提供とともに、訪れる人々へ安平町が歩んできた歴史と鉄道文化・遺産の双方の魅力を体感してもらっている。開業初年度に八七万人もの来場者があったこの施設の集客効果は観光だけにとどまらず、地域活性化の拠点としての役割を担い、町の可能性を広げる施設となっている。

しかし、この施設の建設にあたっては、議会・町民を大きく二分する論争が展開された。

建設経過 道の駅建設構想は平成十六（二〇〇四）年の旧追分町時代にまで遡る。当時、旧早来町と旧追分町は合併協議が進行していたが、その一方で、旧追分町は自立の道を決断した場合を想定した「第三次追分町総合計画」を策定していた。

この計画には、同年四月に新町長として就任した瀧孝の公約に基づき、地域の様々な観光要素を繋げる拠点づくりとして道の駅建設構想が明記された。また、これ以前の平成六年時点での追分町新長期総合計画では、旧追分町の地域発展の象徴である鉄道をモチーフとした「鉄道文化公園」の整備が計画されている。

これらは実現に至らなかった施策ではあるものの、平成十八年三月二十七日の合併により誕生した安平町の「第一次安平町総合計画」にも引き継がれた（クラスターステーション・鉄道資料館の記述）。

潮目が変わったのは平成二十六年四月である。瀧町長が初代安平町長としての集大成として臨んだ第三期目の出馬において、旧追分町が構想していた観光拠点施設と鉄道文化施設を一つにした道の駅を追分柏が丘地区に建設することを公約として掲げ、無投票当選後の六月定例町議会に施設建設に係る基本設計費を予算計上するに至り、その実現が現実味を帯びてきた。

一方で、議会・住民はこの建設に対して懐疑的な声も多かった。完成した基本設計に基づいて平成二十七年五・六月に計一二回にわたって行われた「重要施策に係る町民説明会」では、施設運営費に関する町の試算に対し、これを不安視する多くの町民の意見があり、町議会議員もこうした町民の声を反映し、町議会では施策成功に向けた町の具体的な対応策の答弁が求められ、その都度、町は対応策を検討し、議会に対して説明が行われたが、整備後の運営を不安視する声はなくなり、建設実現は進まなかった。

その後、建設推進派、反対派の間で数々の議論があったが、平成二十九年度になってよ

うやく予算は成立し、ここに鉄道文化を象徴とする安平町の道の駅建設が実現することになった。

施設概要と建設 道の駅は、国と町による一体型施設とし、国（北海道開発局）による駐車場整備敷地を合わせ、全体で約一万五七四五平方メートル、駐車台数一一七台、二四時間トイレを備え、施設はセンターハウス（テイクアウトコーナー、特産品販売コーナー、ベーカリーコーナー、アトリウム、レガシーギャラリー、観光・情報コーナー）、農産物直売所とともに、安平町の指定文化財D51320号機や関連資料を展示する鉄道資料館と屋外に車両を展示するSL広場で構成される。また、施設の南側の隣接地には子育て世代を意識した柏が丘公園も整備する計画とされた。

特に旧追分町は鉄道のまちとして栄え、日本で最後にSLの定期運行が行われていた町でもあり、町内の元国鉄職員で構成される安平町追分SL保存協力が整備するD51320号機を鉄道資料保管庫（旧鉄道資料館）から移設して道の駅に展示するとともに、道の駅開業後は定期的に屋外展示できるよう、SL広場までの線路を敷設するなどの斬新な構造が特徴である。

当初、平成三十（二〇一八）年九月中旬にSLを建設現場の鉄道資料館へ移設する予定であったが、同年九月六日に発生した北海道胆振東部地震により、建設中の鉄道資料館内のピットが地盤沈下するなどの被害を受けたため、開業後の令和元（二〇一九）年六月に延期されることとなった。

写真 D51 移設中の写真入ル

道の駅の建設事業費は約十億二千万円で、財源については社会資本整備総合交付金や地方創生推進交付金などの国庫補助金のほか、合併特例債と北海道地域づくり総合交付金をセットで活用するとともに、ふるさと納税で寄せられた寄附金を建設事業費に充てることで、一般財源による負担を極力軽減することに努めた。

開業後の展開 令和元（二〇一九）年五月十八日、「あびら復興感謝フェス！」が開催された。このイベントは、北海道胆振東部地震で甚大な被害を受けた安平町の復興活動に取り組んだ災害ボランティアへ感謝を伝えるため、町民と「安平町復興加速実行委員会」が協力して実現したものである（『広報あびら』N.〇一五四（二〇一九年四月）、N.〇一五五（二〇一九年五月）、N.〇一五七（二〇一九年七月））。

さらに、安平町の観光振興と鉄道文化の継承を目的として、クラウドファンディングを活用した特急列車「キハ183系」の保存プロジェクトが実施された。平成三十（二〇一八）年一月～三月末にかけて全国の支援者から千三百万円以上の資金が集まり、プロジェクトの結果、保存車両二台のうち一台は道の駅あびらD51ステーションに、もう一台は

鉄道資料保管庫に保存されることになった。特に道の駅あびらD51ステーションでは、「鉄道文化の未来継承」をコンセプトに、保存車両が展示され、道の駅のシンボルとして活用されている。また、保存活動の継承と広報活動を目的に「あびら鉄道交流推進協会おぞら会」が設立された（安平町WEBサイトおよびREADYFOR WEBサイト「北海道・鉄道史の誇り。往年の「特急おぞら」を国鉄色で未来へ」）。

開業から六年後の令和七年六月十一日には来場者が四〇〇万人を達成し、観光拠点としての役割を果たしている。このように、道の駅あびらD51ステーションは、観光拠点としての機能だけでなく、地域経済の活性化や文化遺産の保存にも大きく貢献している。

第二節 一般社団法人あびら観光協会

平成二十（二〇〇八）年五月二十八日、「安平町観光協会総会」（安平町観光協会一元化総会）が開催され、旧早来町と旧追分町にそれぞれ存在していた観光協会を統合し、新たに「安平町観光協会」が設立された。同協会は「安平町の観光事業の育成発展及び特産品の宣伝紹介並びに地場産業の育成を図って、まちの観光及び産業の振興に寄与すること」を目的としており、観光イベントの企画運営、観光資源の調査・保護、特産品の宣伝、観光情報の発信など、多岐にわたる活動を展開することで、地域全体で観光振興を推進していく方針が示された。

総会で来賓として挨拶した瀧町長は統合の意義について「観光協会の一元化により、早来・追分の両地区が連携し、安平町全体としての観光振興が可能になることは、地域活性化に向けた大きな前進である」と述べた。また、地域ブランドとしてアサヒメロンの商標登録を進めていることにも触れ、「地域資源を活用したブランド化が町の観光と産業の発展に繋がる」と強調した。この総会で会長に小林正道、副会長に眞鍋高一・土田耕啓・澤田弘士・楠野公夫が役員として就任した（安平町観光協会総会議案）。

「安平町観光協会」は任意団体として活動が続けられたが、平成二十八年四月一日に一般社団法人あびら観光協会（以下、あびら観光協会）として法人化された。これにより、資金の借入や旅行業への登録などが可能となり、観光事業の展開がさらに広がることが期待された（『広報あびら』No.一二三、二〇一六年六月）。

道の駅の運営についても、あびら観光協会が指定管理者として担っているが、道の駅の指定管理者は、施設の設置目的と団体の設立目的が合致する町内の法人が担うことが重要であるという考えのもと、平成二十八年十一月に、あびら観光協会を候補団体として選定し、「道の駅あびらに係る運営・開業準備の協議に向けた協定書」を締結。運営手法や販売品の検討に関する約二十項目の協議を進め、平成三十年三月に全項目の協議が終了し、「協議終了書」が取り交わされた。同年六月に開催された第四回安平町議会定例会において、あびら観光協会を道の駅の指定管理者として指定することが議決され、同年七月三日に「道の駅あびらD51ステーション指定管理者基本協定書」の調印式が行われた。調印

式には、あびら観光協会から小林代表理事・田上専務理事・高津事務局長が出席し、町から及川町長・村井副町長・地域推進課道の駅経営推進グループの職員が参加した（『広報あびら』No.一四九、二〇一八年八月）。

第三章 安平町の主な観光資源

第二節 鹿公園と町内のキャンプ場・パークゴルフ場

鹿公園の概要 「鹿公園」は、明治三十五（一九〇二）年に日本で最も早く保健保安林として指定された歴史的な公園で、安平町を象徴する自然・文化資源の一つである。JR追分駅から西へ約五百メートルというアクセスの良い場所に位置し、町民や観光客の憩いの場として長年親しまれている（安平町WEBサイト）。

鹿公園の大きな魅力の一つとして、四季折々に変わる豊かな自然環境がある。春にはミズバショウやエゾヤマザクラが咲き、緑溢れる風景が広がる。夏にはスイレンが池に美しく咲き誇り、夜にはホタルが舞い、幻想的な光景が楽しめる。秋にはモミジやイチョウが色づき、公園全体が明るい紅葉に包まれる。冬には雪が積もり、静寂の中にたたずむ木々が幻想的な雰囲気醸し出す『広報あびら』No.一八八、二〇二三年二月および安平町WEBサイトに。

公園内にはキャンプ場の他、多彩な施設が整備されており、豊かな自然と充実した施設の調和により、レジャーや散策に最適な空間を提供し、町内外からの来訪者を魅了し続けている（図表11-3-1、参照）。

図表11-3-1 入ル

鹿公園という名称にあるとおり、公園内ではエゾシカが飼育され、訪れる人々に親しまれている。昭和四十六（一九七二）年には、初めて様似町から雄と雌のエゾシカが導入され、『ポッポくん』『ポッピーちゃん』と名付けられた。その後、自然繁殖により徐々に数を増やし、現在では複数頭のエゾシカが公園内で飼育されている。エゾシカは、公園の象徴として親しまれ、鹿公園は観光客や地元住民の間で人気のスポットとなっている（『広報あびら』No.一八八、二〇二三年二月）。

鹿公園の整備 鹿公園では、平成三〇五（一九九一～一九九三）年度にかけて大規模な整備事業が実施された。これにより、イベント広場・キャンプ場・憩いの広場・遊歩道・管理棟・屋外ステージ・バーベキューハウス・動物ハウス・休憩所等が整備された（平成二十八年四月作成 鹿公園管理区域（鹿公園の沿革））。さらに、平成二十五年にかけては、パークゴルフ場や子ども向け施設、ドッグランの整備が行われ、地域住民や観光客がより快適に利用できるようになった（『広報あびら』No.四九、二〇一〇年四月、No.一五四、二〇一九年四月）。

鹿公園キャンプ場（追分白樺二二） 鹿公園内のキャンプ場は、四月下旬～十月下旬まで

営業し、令和二（二〇二〇）年からは予約制の「手ぶらキャンプ」プランも提供されている。この手ぶらキャンプは、テントやシュラフ、焚き火台などの基本的なキャンプ道具が一式貸し出され、キャンプ初心者や道具を持っていない人でも気軽にアウトドア体験ができるよう工夫されている。利用者は食材や飲み物を持参するだけで、すぐにキャンプを楽しめるため、特に家族連れや観光客に人気がある（安平町なび）。また、フリーサイトや区画サイトもあり、それぞれのスタイルに合わせたキャンプが楽しめるようになっていく。

『広報あびら』No.一六八、二〇二〇年六月、No.一三、二〇二〇年十一月）。特に、近年はキャンブームの影響やアウトドアへの関心の高まりを背景に、鹿公園キャンプ場およびときわキャンプ場（後述）の利用者数が増加傾向にあり、中でも、道内（町外）からの来訪者が多く見られ、これらのキャンプ場が町外観光客の受け皿として重要な役割を果たしていることが分かる。

図表1132 入ル

ときわキャンプ場（早来北進一〇二五） 「ときわキャンプ場」も、近年のキャンブームの影響で訪問者が年々増加している人気の施設である（安平町WEBサイト）。毎年春から秋にかけてのキャンプシーズン中、多くの利用者が自然豊かな環境の中でアウトドア活動を楽しんでいる。また、ときわキャンプ場においても、令和三（二〇二二）年から「手ぶらキャンプ」の受け入れを開始し、必要な道具を取り揃えている（安平町WEBサイト）。

このキャンプ場には、全長七〇メートルの巨大滑り台やアスレチック設備が整い、家族連れや初心者キャンパーにとっても使いやすいキャンプ場である。宿泊設備としては、バンガローとツリーハウスがそれぞれ一三棟と一〇棟あり、どちらもコンセントと照明を備えている。隣接する公園には多様な遊具もあり、子どもから大人まで楽しめる施設となっている。

『広報あびら』No.一六六、二〇二〇年四月）。

その他のキャンプ場 安平町には、先述の鹿公園キャンプ場やときわキャンプ場の他に、民間が運営する「弥生パークキャンプ場」と「ファミリーパーク追分キャンプ場」がある。

「弥生パークキャンプ場」（追分弥生一五〇）は、広々とした芝生のフリーサイトで、テントを自由に設営できるキャンプ場である。芝生の上でゆったりとした時間を過ごせるように整備されており、ドッグランも備えている。また、「ファミリーパーク追分キャンプ場」（追分旭六四八）は、フリーサイトのオートキャンプ場で、施設内にはドッグランを備えた貸切サイトやコインシャワー、炊飯場、食堂などの設備が充実している。オートサイトは車の乗り入れが可能となっており、冬キャンプも楽しむことができる（一般社団法人 あびら観光協会『安平町 黄色の絨毯の上で。』および一般社団法人あびら観光協会WEBサイト）。

パークゴルフ場 安平町には複数のパークゴルフ場があり、それぞれが異なる魅力を持つ

ている。これらのコースは初心者から上級者まで楽しめるように設計されており、安平町はパークゴルフ愛好者にとって魅力的な場所になっている。

安平町のパークゴルフ場

ときわ公園パークゴルフ場（早来北進一〇二五）

一八ホールからなるこのコースは全長八七六^{メートル}。ときわ公園内の自然に囲まれた環境で、木々の間を縫うようにプレーするチャレンジングな設計が魅力である。

佐藤観光農園パークゴルフ場（早来北進三九二）

三六ホールと充実した規模を誇り、芝の手入れが行き届いたコースはファミリーから上級者まで楽しむことができる。季節ごとに農園で採れる新鮮な野菜の直売も行われている。

安平山パークゴルフ場（追分豊栄一九五二）

四五ホールからなる安平山の自然の地形を活かしたコースで、初心者から上級者まで対応可能である。日本パークゴルフ協会の公認コース（N・四〇七）として整備されている。

佐藤冬季室内パークゴルフ場（早来北進三九二）

冬季限定でビニールハウス内に赤コース（一八一^{メートル}）と白コース（二〇一^{メートル}）の二七ホールが用意されており、室内は天然芝で夏場と変わらないパークゴルフを楽しめる。

鹿公園パークゴルフ場（追分白樺二二二）

六九三^{メートル}の一八ホールはショートホールが多く、ホールインワンを狙いやすい構造となっている。初心者も気軽に楽しむことができるコースである（一般社団法人 あびら観光協会『安平町 黄色の絨毯の上で』）。

写真 鹿公園 写真入ル

第二節 安平山スキー場

安平山（あんぺいざん）スキー場の概要 追分地区に位置する「安平山スキー場」は、地域

住民にとって身近な冬のレクリエーション施設として親しまれている。また、新千歳空港が近いこともあり、空港から直接タクシーや鉄道・レンタカーを利用して来場する道外観光客や訪日外国人観光客も見受けられる。このスキー場は、多彩なゲレンデを有し、初級・中級・上級の三コースに加え、自然の中で滑走を楽しめる林間コースも備えている。

また、無料で利用できるソリ専用コースがあり、小さな子どもでもスキーヤーやスノーボーダーを気にせず、安心して楽しむことができる『広報あびら』N・一三〇、二〇一七年一月）。

サービスの向上 安平山スキー場では、オープン後もゲレンデの状況や滑走コースの制限情報を、町がWEBサイトやLINEで随時発信しているため、来場者は事前に最新の情報を確認することで、より快適で安全なウインタースポーツを楽しむことができる。スキ

ー場の開業日には、多くのスキーヤーやスノーボーダーが訪れ、賑わいを見せている『広報あびら』N.〇.八二、二〇一三年一月、安平町WEBサイト、安平町LINE公式アカウント）。

さらに、親子で楽しめる日中券の親子セットやスキー・スノーボードを満喫した後に「ぬくもりの湯」を利用できる「ぬくもりセット」も、リーズナブルな価格で提供されている『広報あびら』N.〇.一三〇、二〇一七年一月）。

写真 安平山スキー場 写真入ル

第三節 鶴の湯温泉

鶴の湯温泉の再生 「鶴の湯温泉」は、植苗村美々で駅通・宿泊業を営みダンケ運送の仕事をしていた井上利三郎によって明治四（一八七一）年に発見された温泉である。井上利三郎はフモンケ地区開拓の先駆者となった佐々木駒吉とも深い関わりがあり、地域の発展に寄与した人物である。この温泉は病の鶴が沢地に舞い降り、冷泉に浴して快癒したとの言い伝えから「鶴の湯温泉」と名付けられた（『早来町史』より）。その歴史と名高い知名度は、地域住民のみならず、町外からも多くの訪問者を惹きつけている（安平町WEBサイト）。温泉の泉質は含硫黄・ナトリウム塩化物・炭酸水素塩泉で、疲労回復や健康維持に効果があるとされている。

この歴史ある鶴の湯温泉は、旧早来町時代から再生計画が進められていたが、町の財政難や経営者との間での計画の相違が原因で進展しなかった。しかし、地元の公衆浴場である「早来湯」が廃業したことを機に、早来地区に限らず町全体で鶴の湯温泉の存続が必要と判断され、再生事業が本格的に始動し、平成二十一（二〇〇九）年、三友プラントグループ「早来工営」が運営主体として再構築することになった（『広報あびら』N.〇.五二、二〇一〇年七月）。翌二十二年七月二十三日には竣工式を迎え、八月の正式オープンを果たした。木造平屋建ての宿泊施設を併設するこの温泉施設は、地域のシンボルとしての役割を果たしており、外観はオレンジ色の屋根が美しく映える風景となっている（『広報あびら』N.〇.六六、二〇一一年九月）。

温泉施設の魅力とサービスの向上 施設には浴場を含め鶴の像が多数設置されており、庭園とも調和する美しい景観に来訪者はその趣ある演出を満喫することができる。また、温泉だけではなく、リニューアルによって設けられた休憩スペースで軽食を楽しむこともでき、風呂上りのひとときをさらに充実させる工夫がなされている。鶴の湯温泉は、地域の観光資源としても重要な役割を担っており、より多くの地域住民や観光客に気軽に利用してもらえるよう努めている（『広報あびら』N.〇.六六、二〇一一年九月）。

写真 鶴の湯温泉 写真入ル

第四節 菜の花畑

丘陵が生む独特な美しさ 安平町の「菜の花畑」は、初夏の訪れとともに広がる美しい黄色の景観で、多くの観光客を魅了している。菜の花は、主に追分地区を中心に町内のいくつかのほ場で栽培され、五月中旬～六月上旬にかけて満開の見頃を迎える。この季節には、まるで黄色い絨毯が広がるかのような風景が楽しめる。特に、丘陵地に咲く菜の花畑は、平坦な場所で見られる他の地域とは一線を画し、高低差がもたらす波打つような花の姿が特徴である。この独特な景観はSNSでも広く注目され、訪れる人々に北海道らしい自然の美しさを提供している（安平町なび）。

安平町における菜の花栽培は、平成二十一（二〇一〇）年に地元農家三軒が結成した「北のなのはな会」によって開始された（『産経新聞』二〇一三年六月七日）。この取り組みは、再生可能エネルギー資源の生成、観光資源の創出、特産品の生産を目的とし、町内有志の並々ならぬ努力のもとで展開されてきた（『広報あびら』N.〇・一八一、二〇二二年七月）。

追分美園エリアを中心に約八カ所、総面積約四十畝にわたって菜の花が栽培されており、毎年五月下旬には畑が鮮やかな黄色に染まり、初夏らしい香りが一帯を包む（『広報あびら』N.〇・一八一、二〇二二年七月）。

菜の花はその鮮やかな景観で多くの観光客を魅了する一方、地元の特産品であるはちみつや菜種油の原料としても活用されている（『産経新聞』二〇一三年六月七日）。また、持続可能な農業を促進するため、一年ごとに作付場所を変えることで連作障害を防ぎ、結果として毎年異なる景観を生み出している点も、観光資源としての魅力を高めている（『広報あびら』N.〇・一八一、二〇二二年七月）。

これら町内有志の情熱と工夫が結集した取り組みにより、菜の花畑は、安平町の観光資源として定着し、地域の未来を支える重要な要素へと成長している。

菜の花さんぽ 一般社団法人あびら観光協会と町が共催し、開花期間中に開催される「菜の花さんぽ」は、菜の花鑑賞と町内観光を組み合わせた盛りだくさんのプログラムが魅力であり、訪れた人々がトラクターに引かれた幌馬車に乗り、ほ場をゆったりと巡る「菜の花ドライブ」や、菜の花畑の中を歩くさんぽ道で写真撮影が可能な「菜の花遊歩道」などで楽しむことができる。また、ボランティアガイドとともに菜の花畑を巡るフットパス（徒歩観光）も人気のプログラムである。さらに、町内の飲食店ではこの季節限定の菜の花メニューが提供され、道の駅あびらD51ステーションでは特産品の販売や道の駅から町内の飲食店を回遊するスタンプラリーなども催される。令和七（二〇二五）年の菜の花さんぽ開催期間には、約十九万人もの来場者が訪れ、町全体が菜の花と観光で賑わった（『広報あびら』N.〇・二〇三、二〇二三年五月）。このイベントは、菜の花畑の美しい景観を楽しんでもらうとともに、町内で複数の観光スポットを巡る仕組みを提供し、町全体の活性化

に大きく貢献している（安平町なび）。

写真 菜の花畑 写真入ル

第五節 あびら夏！うまかつり

祭りの概要 安平町最大の夏祭りである「あびら夏！うまかつり」は、平成二十一（二〇〇九）年、「かしわまつり」と「メロンまつり」を統合して誕生し、毎年七月に「ときわ公園」を会場に開催されている。町の特産品である「アサヒメロン」や「はやきた和牛」などの食文化、馬産地としての「馬」文化、そして多彩な芸能・パフォーマンスが融合した独自のコンセプトを持ち、地元住民や観光客に夏の楽しみを提供しながら、町の魅力を広く発信している『広報あびら』N.一八九、二〇二三年三月）。

祭りは二日間にわたって開催され、初日には一二〇〇発の花火大会が行われ、夜空を彩る壮大な演出が来場者を魅了する。二日目はタレントショーがメインとなり、人気アーティストや地域のパフォーマーによるステージが観客を楽しませるほか、「アサヒメロン早食い競争」や「ポニーサイクルグランプリ」といったユニークな競技も人気を博している『広報あびら』N.四一、二〇〇九年八月）。

また、会場では地元食材を活かした料理や特産品を使ったメニューの販売が行われ、新鮮な農産物の直売も実施されるなど、来場者が安平町の味を直接楽しめる機会となっている『広報あびら』N.一四九、二〇一八年八月、安平町なび）。

この祭りは、町内外の事業所等から多くの協賛を受けながら継続している。また、会場設営や物品の搬入・搬出には地域住民をはじめ、陸上自衛隊安平駐屯地および早来分屯地隊員、地元企業のボランティアも参加しているなど、地域一体となった運営体制が整えられている（『広報あびら』N.二〇八、二〇一三年十月）。

このような中、毎年開催している祭りも、新型コロナウイルス感染症の影響で、令和二（二〇二〇）年と令和三年は中止となったが、令和四年には感染防止対策を講じながら規模を縮小して開催された。町民からの根強い支持もあり、町民や来場者が楽しめる恒例の祭りとして定着し、近年では二万八千人ほどの来場者が訪れている。

写真 あびら夏！うまかつり 写真入ル

第六節 ノーザンホースパークマラソン

ノーザンホースパークマラソンの歩み 「ノーザンホースパークマラソン」は、苫小牧市に位置するノーザンホースパークを舞台に、平成二十三（二〇一一）年五月十五日に初めて開催され、子どもから一流選手まで約千三百人が参加する大会として始まった。この大会

は安平町が共催しており、町内の遠浅や富岡地域がマラソンコースの一部に設定され（図表1133）、多くのランナーが風光明媚な新緑の馬産地を駆け抜ける（『広報あびら』N。六三、二〇一二年六月および「ノーザンホースパークマラソン二〇〇四【公式】」）。マラソンブームを背景に、参加者数は、平成二十三年の一三三〇人から、令和七（二〇二五）年には四四四九人へ拡大し（ノーザンホースパークマラソン公式WEBサイト）、町内外からの多くのランナーが自然豊かな春の安平町を快走した。

図表1133 入ル

地域住民と共に 平成二十三（二〇一一）年の第一回大会から、町民もランナーやボランティアとして大会を支え、地域一体となった大会の様子が見られる（『広報あびら』N。一三五、二〇一七年六月）。この年は、ボランティア参加者数が当初の目標一五〇人を大きく上回る二三七人に達するなど、町民の関心の高さがうかがえる（「安まち第三一号」『安平町史資料』平成二十三年五月十八日）。このマラソン大会は、安平町の春の風物詩として多くの人々に親しまれているイベントである（『広報あびら』N。一四七、二〇一八年六月）。また、レース以外にも様々なブースや催し物が行われ、安平町民だけでなく、訪れた多くの人々が楽しむイベントでもある（『広報あびら』N。一五六、二〇一九年六月）。

写真 ノーザンホースパークマラソン入ル

第七節 ゴルフ場

町内に多くのゴルフ場がある安平町は、ゴルフ愛好者たちに「ゴルフ銀座」と呼ばれており、新千歳空港からのアクセスの良さからも、ゴルフ好きの注目を集めている。

安平町内のゴルフ場

アロハカントリー倶楽部（早来緑丘二六八―二 一八ホール・パー七二、六七四二ヤード。
安平ゴルフ倶楽部（早来富岡四三八―二 一八ホール・パー七二、七〇八〇ヤード。
早来カントリー倶楽部（早来新栄六七―二 三六ホール・パー一四四、一四一四一ヤード。
北海道クラシックゴルフクラブ（早来富岡四〇六） 一八ホール・パー七二、七〇五九ヤード。
（一般社団法人 あびら観光協会『安平町 黄色の絨毯の上で。』）